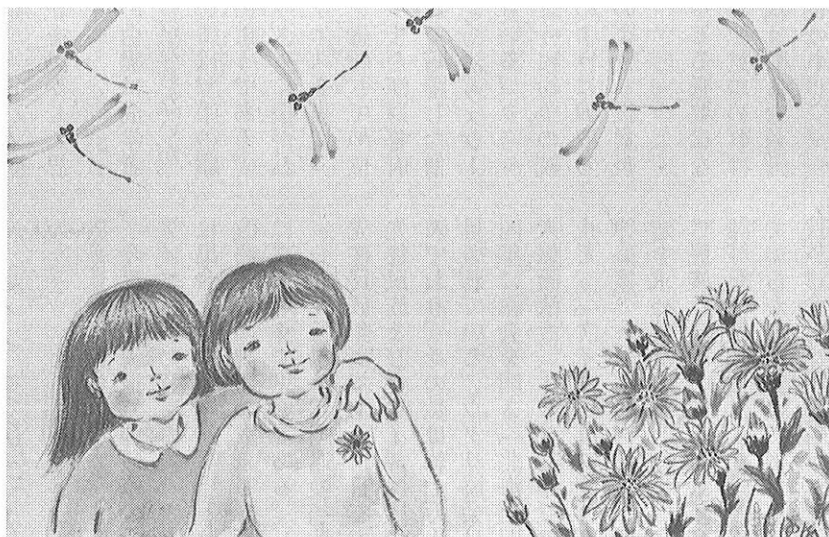


光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
編集／光の子 編集委員会
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
TEL／0480-72-3883
振替／東京 3-128022
印刷／社会福祉法人 共愛会



絵・中島 英子

なかよし

こよし

接木された人へ

(ローマの信徒への手紙 第十一章十三～二十四節)

理事長 福島 勲

この春早々にその筋の本を参考にバラの接木を試みたが、どこがどうだったのか見事失敗した。この辺ではバラは接木より挿し木の方が容易だと古老が教えてくれた。

聖書にも接ぎ木の譬がある。野性の木の枝であるわれわれが、良いオリブの台木であるキリストに接がれたのだとこのことである。

切り取られた他の枝に対して誇ってはならない。滋養分は台木のキリストから得ているのだから……とある。

ところで現行聖書のこの譬の訳は読みにくい。新共同訳の方が多少わかり易いが、それでも接木というのは、台木が野性でそれに質の良い枝を接ぐのである。聖書はあべこべになっている。台木がキリストであり接穂が悪い野性のオリブである。

ある注訳書は言下に、パウロはハズバンドリ（農事）には無知だったと決めつけている。

パウロは接木について知っていたのだらうが、実際に行ったことがなかったのだらう。それで勘違いして引用したのかも知れない。

だがいずれにしても、その言わんとするところは明白である。カボチャを台木にキュウリが接がれ、ナスやトマトも耐病などに強い台木に接ぐ、自然のままのものより丈夫に育ち、良い実が稔る。今日農家では通常の操作である。

ダーウィンは進化論を説いた。人間だって進化して今日のようなになったと考えるが、必ずしも賛成されていない。アインシュタインは神はサイコロ遊びはしない（自然は決定論的法則に従う）という。

が、神はサイコロ遊びをする、と日本の遺伝学者木村資生氏は反撥する。長時間かけて徐々に変化するのではなく、偶然に変化するという。飛躍を繰り返して実現していくのだという学者

もいる。(ステューヴン、ゲールド・米・生物学者)「ギ・ソルマン著」二十世紀を動かした思想家たち」

こうした論議の白黒は尚学者らの研究を待たねばならないが、人間の罪性については、手の届かない遠い問題のようである。

基督者が、キリストに接されたといっても、イエスを裏切ったユダヤ、教皇を毒殺して地位を得んとした者、また江戸幕府の内側に入り込んで暗躍した僧天海にも似た、ロシアのラスプーチンのような者もいる。

どこかの国のように紛争の続く教会や、法皇のように陣取る牧師や明智光秀のような役員長老もいる。

いや遠くに例をとる必要はない。各自自身自身を見つめれば誠に汗顔、汗を拭う暇もない。

このような人間なればこそ一層に、キリストなる台木に結びついていない限り、枯渇してしまふ。枝なる我々の誇るべきものはない。根が枝を支えているのだからである。

アイヌの子どもたち

施設長 今関 公雄

今夏、北海道での研修の折にアイヌ(人の意)の人々と文化に出会うことが出来た。そして、改めてその課題の大きさと深さに立ち尽くす思いである。

一九九三年は、国連の「世界先住民族年」である。日本でも先住民族としてアイヌ民族が住んでおり、その数は約七万人と目されている。ウタリ協会は八四年に総会を開き「北海道旧土人保護法」(1899年)の廃止と、「アイヌ民族に関する法律(案)」(アイヌ新法)の制定を求める決議をした。

民族は自己の文化、宗教、言語等を受け継いでいく権利をもっているが、日本においてアイヌ民族は今も法的には「旧土人」とされ、民族自決権に伴ういつさいの権利が奪われたままとされている。

アイヌ・モ・シリ(人間の・静かな・大地……北海道の意)へのシャモ(和人)の侵略は五百年以上も前から始まり、殊

に明治政府と資本が一緒になり、その侵略・植民政策を完成させて、私はここで政治問題を論じるのが本意ではない。この

ような歴史的背景を持つアイヌの人々の今日的な苦難に連帯したいと思うのみである。

そもそも、アイヌの人々は狩猟と漁獲で自給自足をする温かな民族であり、山の神、水の神、木の神など、つまり自然を神として敬い、仲良く生活していた特質を持っている。あるアイヌの詩はこれを示している。

われ 自らを育てる
われアイヌモシリに生まれ
アイヌモシリに育つ
われ 風と語り 木と語り
自らの魂と語り
この大地に命となる

「アイヌ死ぬ」の落書きが学校の黒板に書かれ、「あつ、アイヌが来た」「汚い、臭い」などの罵声が浴びせられる中で、ア

イヌの子どもたちの不登校や学力不振がある。親は大半が出稼ぎや日雇い、生活保護受給などの苦境にあるとのことである。

実は、このような差別の下で苦闘しているアイヌの子どもたちの為に、ヴォランティアで学習塾の活動を続け、不登校や学力不振の克服のため、奮闘している青年教師の生の声を聞くこともできたのである。(付記)

このことで光の子どもの家の開設前後を想起し、また事実としてアイヌ出身の子どもたちを数年間お世話したことも改めて思い起こさせられたのである。更に、先の青年教師も光の子どもの家も、差別が無く、いと小さく弱い人と共に生きる新しい人間の形成を子どもたちに託している共通点を持っている。ここに明日の社会と歴史の希望がある。

左記にご支援下さると幸いです。

「とかちエテケカンパの会」
〒〇〇 帯広市大空町二一七
TEL 〇一五五―四七―五二二八

エッセイ

祥子ちゃんからの手紙

中島 睦雄(県立高校教諭)

「祥子ちゃんから手紙が来たの」と浩子がいった。一瞬誰のことだか分からなかった。「ほら、病院でお世話になった看護婦さん。」と言われてみて、あの頃の病院内の様子を思い出した。そして、小柄で白衣のよく似合う中村さんの姿がすぐ私の頭に浮かんだ。「中村さんは元気なの?。」と私が聞くと「もちろん元気よ。もう病院を辞めて結婚して子どもが三人いるんだよ。」と浩子は言った。「それよりもね……。」と中村さんからの手紙のことをいろいろと話してくれた。

いぜん私は「おすもうさんは」と言う短い文章を書いたことがある。浩子の病室の、廊下を隔てた向かい側の部屋に入っていた若い力士のことを書いたものである。彼は二十歳にも満たないような、色白でバランスよく肥った好青年であった。又、彼の所にはいろいろな力士が見舞

いに来っていた。高名な関取も時には現れた。昭和六十一年四月二十七日に、浩子が私に筆談をするときに見せたメモが残っているが、それを見ると、髪の毛の伸びが、それをみると、髪は伸びが、腹がボンと出たその力士の後ろから、見舞客らしい、これ又若い力士がついて歩いている絵がある。そして「お相撲さんは、空色のパジャマ着て、どこが悪いのでしょうかね。」と絵の上に書かれている。

私はこの短い文も含めて、昨年暮れに四百ページほどのエッセー集を出版した。中村さんは、これを見たのである。そしてその感想やら何やらを浩子に書いてよこしたという訳だ。中村さんはその中で、例の若い力士について触れ「実は私はあの人の担当だったのです。だから、あの文をとってもなつかしく、悲しく読ませていただきました。」あの若い力士は、私には余り

病人らしく見えなかった。静かで堂々としていた。そして、人に対して非常に親切だったという。浩子がだいたい良くなって、恐る恐るながら廊下を歩けるようになった頃、彼と出会うと必ず、浩子をかばう様になってくれた。力士社会での生活習慣からなのか、持つて生まれた性格としての優しさからなのか分からないが、細かい仕ぐさの中に、はっきりと思いやりの心が読み取れた。

彼は心臓に病気を持っていた。だから、退院したとしても再び土俵上に立つことは不可能であった。他の社会の人間ならば、青雲の志に燃えて最初の歩みを踏み出す年齢なのに、彼はもう、そこで自分の未来に、越えることの出来ない壁を見てしまったのである。その頃中村さんが彼の担当だったという事を私たちは知らなかった。看護婦さんたちは他の患者の噂話などはしないものだからである。特に病状の重い人についてはそうである。

私はいつも、病室の浩子のベッドのそばの窓際に腰を下ろし、廊下側に顔を向けていたから、

時々彼の姿を見るだけだった。そして退屈してしまつて外を眺めると、ヒマラヤ杉の大木のそばに霊安室のある建物が見えた。そこは、いつもひっそりと静まり返っているように見えた。

この病院では、患者が亡くなると、すぐ霊安室に移し、線香を立て、花を一輪供えるのがならわしだった。

「中島さん、この花借りていきますね」と中村さんが言ったのを、浩子は今頃になって思い出した。「どうぞ、全部良いですよ。」と答えたのに「良いのよ一輪だけで。」と白いトルコキキョウを持って、中村さんはどこかへ行ってしまった。

浩子はそれ以来、あの若いおすもうさんの姿を見ることはなかった。

「田舎へ帰ってチャンコの店でもやってるよ。」などと気楽に、あの若い力士について話しかけていたのに、祥子ちゃんからの手紙は、私たちに決定的な結論を与えてしまった。

採光

天使になれなくて…(5)

名古屋大学付属病院 江崎 満

朝六時四十分。一向に起きる気配のない息子と夫を揺すり起こす。寝ぼけ眼の息子にかぶせたボロシャツは、二つもボタンが取れている。(ま、いいか、脱げる訳じゃない。)

「カアちゃん、オシッコ。」二歳になる息子は、トイレットトレーニングの真つ最中だが、これがやっかいである。

「いいよ、オムツにしちゃいなさい。」そう言い放つとバックの牛乳とロールパンを息子に握らせ、荷物とともに息子を車に詰め込む。七時ジャスト、出勤である。「洗濯とゴミ、忘れないでね。」窓の外から夫に大声で叫びながら。

我が家では息子が満六ヶ月の頃から、こんな生活が続いている。半年間の育児休業中は、育児書をどっさり買い込み、やれ無農薬離乳食だ、早期英才教育だのと今時の母親をしていた。仕事復帰してからは、すっかり紙オムツとレトルト離乳食、イ

ンスタント食品のお世話になる毎日となった。

看護婦の子育てに致命的なダメージを与えるのはやはり夜勤である。月に九、十回、子どもの半ばあきらかに近い寂しさ、夫の仕事の犠牲の上にある献身により、綱渡りのような今の生活が成り立っている。息子が初めてしゃべった二語文は「パパ、カイシャ。ママ、ビョウイン。」昼間の認可保育園と院内の共同夜間保育所での二重保育で、息子はいつの間にか大きくなってゆく。親の知らぬ間にミルクも卒業し、スプーンやコップも独りで使いこなせるようになっていた。トイレでオシッコも上手にするらしい。教えた覚えのない言葉や唄も、口をついて沢山出てくるようになった。母のいない夜にも、いつのまにか慣れてしまったようである。

我が家のピンチは息子が病気の時である。交替勤務の私はとてい休める筈もなく、日頃夜

勤時の子どもの送迎で残業をバサしている夫も休むことは極めて困難である。三九度以下なら、座薬を入れて保育園に連れてゆきましょう。ある時は、四十度近い高熱を同時に出して寝込んでしまった夫と息子を家に残し深夜勤に出勤した。さすがに胸が痛んだ。その夜患者さんに氷枕を作りながら(何のために看護婦をしているんだらう。)&虚しくなったものだ。

学生の頃、一番好きだった母性看護学の先生は三児の母でもあった。末っ子は一歳。

「家の中なんて、もうめっちゃくちゃよ。」と笑っていたが、卒論の面談などで休日に出勤するときは、子どもとノートと分厚い専門書を抱えていたものだった。いつだったか、彼女にこんな質問をしたことがあった。

「仕事なんて辞めちゃって、子どもとずっと一緒にのんびりした生活に入ってみたいと思うことありませんか。」素朴な疑問だった。彼女はほんの数秒考えた後、小さく微笑んでこう答えたのだ。「それも悪くないね。でもきつと一週間で寂しく

なっちゃうだろうな。仕事のな自分なんて考えられない。子どもと過ごす時間は、量じゃなく質が大切何じゃないかな。」あれから六年、私もいつしか彼女と同じ道を選んだ。私もまた、仕事のない自分など考えられないと思う。

「あなたみたいな、天使のような方がいてお家の方々は幸せね。ご主人も子どもさんも。」ある夜、足が怠くて不眠を訴えてきた患者さんに足浴とマッサージをしていたとき、患者さんに言われた言葉である。出勤前、洗濯を忘れた夫にくどくどと文句を言い、インスタントカレーを絨毯にこぼした息子をひどく叱ってしまった。(とんだ天使がいるもんだな。)

ふと、身にまとった天使の衣がたまらなく不似合いに思えて気恥ずかしくなった。今頃、二人してお腹を出してすやすや夢の中だろうか。明日の夕御飯は、久しぶりに二人の大好物のシチューでも作ろうか、などと思いつつ曲がったナースキャップを真っ直ぐに被り直してみるのだった。

学者もどきのつばやき(5)

経験することの大切さを教えられる

山形大学医学部教授 仙道 富士郎

前にもパラグアイでの医療協力のことについては触れた。研究所のレベルアップを目的としたプロジェクトは、この三月に五年間の協力期間が満期になり一応終了した。研究所がレベルアップしても、それが即住民の健康増進にはつながってはいかない。そこで、研究所の成果を基にして、よりパラグアイの人々の保健に直接的に役立つプロジェクトの開発調査のために、この夏一ヵ月ほどパラグアイに滞在した。筆者はすでに六回ほどパラグアイを訪れているが、研究所のある首都アスンシオンだけに滞在し、アスンシオンの外に出たのは、有名なイグアスの滝を見物に出かけたときぐらいのものである。しかし、今回の調査の目的は、住民の保健の増進に何か必要かを調べることであるから、首都に閉じこもっているわけにはいかず、住民の保健管理が特に遅れていると考

えられるパラグアイの田舎(農村)に出かけて行って調査を行った。パラグアイの中でも特に遅れている地域の一つとしてカアサ県という県を訪れた。少なくとも私の住む山形県よりは広いこの県には二〇万人足らずの住民しか住んでいない。多くの土地は痩せた牛たちが草を食む牧場で占められている。牧場主はほとんど首都アスンシオンに住み、使用人たちが牧場を管理しているという。カアサ県のもっとも大きな地域中央病院でまず驚かされた。そこには、レントゲン装置もないのである。このような現実も知らないで、これまでの五年間「医療協力」を行ってきた自分をまず恥じた。病院長、婦長とともにジープに乗って各部落を訪ねた。道路というには余りにも埃がたち、車が通って一旦雨が降ると粘土質のその道路は滑ってジープでも通れなくなるという。二・三日

雨が降り続けば、道路は川と化し陸の孤島になるところも出てくる。カアサ市から離れると間もなく、水道の便がなくなり、次には電気がなくなり、さらに遠くなると井戸も便所もないところまで人々は生活していた。県庁所在地(といっても地方分権がまだ発達しておらず、しっかりとった県庁があるわけではない)から車で一時間少し行ったところで、井戸も便所もない居住地があるうとは夢にも考えていなかった。

一方、全く違った意味でも私は驚かされた。日本人から見れば、およそ想像のつかないような生活をしているパラグアイの農村の一部の人たちはお互いに労働力を提供しあって、ヴォラ

ンティア活動によって診療所を建てているのである。(資材は外国の有志団体から供与されている。)いま、日本人の中にこのような家たちの共同体意識が残っているだろうか。そして、レントゲンもない地域中央病院ではあるが、少なくとも私の接したそこで働いている人たちの何人かは目を輝かせて、いきい

きしていた。婦長さんは田舎を回って看護婦教育や、母親の教育を担当しているのだが、彼女の余り上手とはいえないノートには、講習会の予定、予防接種の予定などが細かく書き込まれ、避妊教育のための母親のカードなどがキチツと整理されていた。看護婦だけがいる診療所の個人カードも婦長の教育がよい為か、よく整理されており、皆同じように「バイクでもあれば、もっと個別訪問できるのだが」と訴えていた。

私たちの五年間の協力は一体何だったのだろうか。研究所のレベルアップは本当にいつかは、この農村の人たちの健康につながっていく可能性があるのか。悩みはつきない。

それにしても、この度の経験は、私にとって何と貴重なものであったことか。この経験をじつと見つめながら、次のプロジェクトについての提言を考えている。



子どもたちの季節

仙道家

「あつゝ悠子ちゃんたち、芝生の中歩いている！」と学校へ急ぐ姉の悠子達を見送る詩美の高い声。小雨がバラつき、まだ九月なのに肌寒い朝のことでした。「えっ／＼」と思い、詩美の大きな瞳のある位置まで降りてみると、本当です！何と悠子達は芝生の中を、今まさに歩いているのです。光の子どもの家は、今年是不作であることが見込まれている田圃に囲まれています。悲しくも青々と茂る稲の眺めはまさに芝生ようです。一年生になる来春を心待ちにしている詩美の視界が映し出した見事な世界。また、少し窮屈になつてきた靴を履きながら、「早くこの靴大きくならないかな。」詩美にとって靴も足もみんな自分の体そのものなのだと思われませんでした。幼い頃には私にもあったのだから全てのものへの同一の思いや畏敬の念。大人になることで失つたものの大きさに愕然としました。

無我夢中で過ごしてきたこでの生活も早いもので六ヶ月目になりました。プラスよりは迷惑を沢山かけてきたと思います。子ども視点、視界から物事を捉える余裕など全くありませんでした。

担当の五人の子どもたちと出会ったとき、私は既に担当者のつもりでした。ギクシャクした関係が続き、子どもからの危険信号にも気がつかず危ない思いもしましたが、先輩方の忠告や協力でどうにか大事には至らず乗り越えられ、この頃やっと子供たちからの担当者らしい対応が見えてきました。

「最近由紀子さんこわくなったよ。」と四年生の高雄。「由紀子さんは怒らないという意味じゃなくて、やさしいよ。」と五年生の将士の精一杯のフォロー。

自分の人格や人間性を問われるようなしんどいときもありますが、意識、無意識のうちにお互いが与え合う影響の大きさを思いながら、出会えて良かった／＼と、子供たちが思えるような関わりを沢山積み重ねていきたいと思っています。

鈴木 由紀子

虹の国から

山登り

四年 大阪 さえ

夏休みに私は山に登りました。前は奥ちちぶのきりもがみねに二回登りました。同じような山だったら登れると思いました。でもみんなすごいように言っていました。どんな山だろうと、どきどきしました。

あさ八時三〇分ごろから登りはじめました。登っていくと木はあんまり生えていませんでした。

大人の何人か何メートルの山に登るのかと聞いたところ、二八〇メートルとおしえてくれました。

ズボンはジーパンで足が動きづらかったです。

途中で沢の所を通りました。私は沢の水を飲みたくありませんでした。木の下の方がかいだんになっていました。その階段につまずいて転びそうになってしまいました。

歩いているうちに足が痛くなりました。休みたかったけど、みんないっしょけんめい登らないといけないんだと思って登りました。ちようじようが近づいて来ると、短い木がいっぱい生えていました。

ちようじように着くとときりで何も見えませんでした。それにとっても寒かったので、カップを着てお弁当を食べました。

帰るときは、いっぱい転んだけど帰りの方が足がいたくなりませんでした。山の下の方にくると、暑くなったのでカップをぬぎました。

とてもつかれて、足がいたくなりたけれど、みんなといっしょにちようじようへ行って、みんな元気に帰ってこれました。

七時間よりもっとかかって山登りは終わりました。また八つがだけの横だけに登りたいです。

光の中で

佐藤家

複雑な思春期の入り口のような夏休みが始まった。五年生の溪子が光の子どもの家で過ごす六回目の夏休みである。心寂しい辛い夏休みになった。

夏休みに入って四、五日して、三年前にお家に帰った塩野姉妹が山登りに参加することをメインに十日間ほど遊びに来た。

夏休みで家にいることで、他の家の子どもたちとの関わる時間も圧倒的に多くなり、特に思春期前後の女の子どもたちの関係は大きく変化した。そこへ又、三年前に暮らし合った親しい同じ年頃の二人が加わって関係がもう一つ変動した。

溪子が仲間から外れだし、大人との関係を求め始める。頼みもしないお掃除をせよとする、台所の手伝いも積極的だ。それが更に他の女の子集団との距離をつくる。

溪子から出されていたたくさんのS・O・Sに、手の打ちようのない頃にやっと気づく私たち大人であった。

とうとう家の中の小さなお金をとってしまおうという「事件」を起こして危険を知らせてくれた。この頃から、懸命に担当者との関係をつくって、心の中にある「寂しさ」を排除しようと頑張ったが、「寂しさ」は無くなるどころか肥るばかりで、夏休みは終わった。

新学期。養護計画の見直しが始まった。岩崎保母の担当の加津子と萌季と私が担当の溪子が一緒に部屋で四月から暮らしていた。思春期の女の子三人という不安定な関係。夏休みの嵐のような関係の変動。危険を知らせる数々の信号。傷つけないように暮らしの場を変えることにする。溪子が私の側に来る。その移る作業中の溪子の小さな違反。家の全員と一緒に暮らすために必要な協力と仲間づくりを呼びかける。溪子は激しい悔恨の感情となって私に抱きついた。六年かけてこんな事をしなければ、抱き合うことさえできない関係しか創れなかった自分の無力さに空恐ろしくなった。池田 祐子

原田家日記

石毛 照子

不順な夏でしたが、こどもたちは新しい学期にいそしんでいます。何といってもこの四十日はたたくさんの出来事や場面、そして思い出の詰まった子どもたちの季節でした。

それについては無力な私たちへの、多くの方々の惜しみのないご協力があったのでした。あらためて感謝いたします。

この九回目の夏も、お盆になってもお家に帰ることの出来ないこどもたちが数人いました。これまでその中の子どもだった前杜兄妹でした。兄の擢也がもうじき親から離れて自立の始まる年齢になることもあり、家族に憧れている今の間に何とかしたいと考えました。行っても無駄かな、という根拠のない憶測が知らない間に出来てしまったようで、三年前から横浜で働いている父の所はまだ一回も訪問していませんでした。家族への関わり計画に、今年是非と提案し訪問が実現しました。

父は留守でしたが、高台への途中にある小さなワンルームマンションを探して当りました。何人かの子どもたちと出会いましたが、あたりの環境もそう悪いものではありませんでした。立ち寄ったというメモをおいて帰ると、さっそく連絡があり、帰省の話もスムーズに運んで、初めての親子で暮らすお盆の一週間になりました。

出かけるときは、やった／＼という擢也の叫びと、ちよびり不安顔の珠弥でした。父の家からは毎日一回、「今、お父さんはお仕事に行つたよ。勉強をして、テレビを見たよ。」などとお知らせコールで、擢也も珠弥も父と過ごすことがとても嬉しそうでした。

連れて帰った父も大変だったと言っていました。しかし、何とも疎遠な感じの親子でしたが、本当にこれまでにない関係の深まりを確認することが出来ました。

愚かな私たちです。生まれてきたことを喜び、親子が一緒にいる事が善い時間であるよう、祈り続ける者でありたいと願っています。

現場から

季節を彩る

竹下 由香

「すぐ怒るなよ!」
「怒っているんじゃないよ。あなたが〇〇だから話しているんでしょ……。」

こんな会話の多い夏休みでした。子どもたちのマイナスを指摘することの難しさを感じるこの頃です。

子どもたちの年齢も上がり、中高生が大半を占めようとしています。自分のマイナスについて指摘されることについて大変敏感になる年齢です。

子どもたちのことを考えると、いつも自分はどうかだったろうかと考えます。ここにいる子どもたちよりもっと、色々なことが「アバウト」でした。親に対してひどい態度ばかりとっていたし、家族に謝った覚えなど殆どありません。親から叱られる度に「私は絶対に子どものことを厳しく叱るような親にはならない!」と、強い決心をしたものです。そんな決心をしていたとは思えないよう

な殊にこの夏の私の子どもたちへの対応でした。

私の経験は家族だから許されてきたのだと思います。〈家庭的処遇〉をめざしている光の子どもたちは、許容範囲をどこまで広げていくのか、いつも悩むところなんです。何よりも、いつかこの子たちはこれから社会という大変困難な世界へ独りで立つのだ、という現実が私たちをことさら緊張させます。

今、この生活で許されていることが、社会では許されないということが分かるだろうか。施設の子どものように、見も知らない多くの人々によって親切にされる事が当たり前のような生活をして育ったとしたら、独りの社会人として周囲の人たちと同等に、この社会が要求する常識的な対応をすることが出来るだろうか。心配はいくらでも膨らんで目の前が暗くなってしまうのです。そんな思いなどがあせりを生むのでしょうか、行き

過ぎる関わりになってしまいうことが多くなってしまう。彼らが社会へ出てからでも、生活を共にした者としての関わりは、求められれば可能なのだろうと思います。何でも今伝えなければならぬわけではないのだからとも思いますが、長い夜は考えさせてくれます。

先日菅野クリニクの菅野先生から、セルフイメージをどのように積極的なものにしていくのかについてなど、たくさんのご指導をお受けしました。

その後の職員会議で、「謝らせる」ということをめぐって考え合いました。どうしても、白黒をはっきりさせたい私には、大変痛く、大いに考えさせられました。

先頃、養護計画の見直しを、一人一人について丁寧な振り返りをし、検討し直しました。

子どもたちは、関わりがないで欲しいことやもっときちんと関わって欲しいなど、たくさんサインを出していること。担当者になりがちに関わりを、光の子どもたちの家の大人が光の子どもの

の家の子どもの育てるのだという原点に帰って、もう一度それぞれのポジションを確認し直すなど話し合ったのです。

特に、連絡しあって、出来るだけ共通の意識を持つこと、その上でダメなものダメという、土井衆議院議長のような対応が必要な時にできるのでしょうか。

あの頃は、うるさいとは思えなかった親の言葉が、今頃になってようやく理解できたり、感謝できるようになったように、この子たちも、いつか分かってくれるときが来るのだからと信じながら、口うるさいおばさんになり過ぎないよう関わろうと思っています。

夜、家を留守にすることを、暁羅に告げると、「じゃあ、お布団敷いておいて上げるね。」と言う。「いつも怒ってばかりの由香さんなのに、暁羅はやさしいよね、ごめんね。」と私。「謝らなくていいの。怒らなきゃダメなの。」と言ってくれる。こんな子たちがいてくれるから、私のようなものもここにいます。と出来るのです。

養護メモ 45

はたらくその六

菅原 哲男

毎年一月末に職員たちのその年度の取り組みへの徹底的な相互批判による総括を行い、次の年度の事業計画策定の作業を始める。子どもたち一人一人について前年の養護計画の丁寧な見直しを経て、次年度を見直し個別の課題と成長を展望して養護計画を策定する。それを最大公約して光の子どもの家全体の事業計画は策定されるのである。

この計画を年度半ばにもう一度見直し年度の後半に臨む。子どもたちの成長の度合は概ね私たちの見通しを大きく上回ることで常だからである。

それに先がけ、貴重なご指導を頂いている児童精神医の菅野主樹先生にお出願して十数名の子どもたちの様子を中心に相談に乗っていただいた。今年は看護婦長さんも加えぶつ通し五時間余りのマラソン相談だった。相談を終え、夕暮れの園庭を眺めながら深い溜息をされた菅野先生は、「二人でも大変なケー

スをよくもまあこんなに……」と呟かれた。

ご指摘されたことは、子どもは出来るだけほめて育てよう。抱っこしよう。一緒に走ったり飛んだり遊ぼうなどごく基本的な子どもへの関わり方であった。このことは、夏休みというフルタイムで子どもたちと暮らす日常生活に埋没していたわたしたちを刮目させて下さった。

さて、子どもを計画して養育することの意味を考えてみる。先に前年にたてられた養護計画の丁寧な見直しを経て、次の年度を見通して個別の課題と成長を展望し、新しい養護計画を策定する、と述べた。そして今、計画を見直して姿勢制御をしようとしている。

この頃、子どもの養育とは一体何だろうと考える。担当職員が五人以内の担当する子どもについての計画を、全職員の参画する会議に提案し検討され修正されたりしながら策

定される。このことに何の疑問も持ち得ない。多くの事柄はこのようなあるべきだと信じて合議制を貫いてきた。

しかし、この疑いようもない手続きやシステムの中に、私たちは微かにでも、計画的に育てることの出来そうな自己を認識してしまいがちな。そこからは、子どもを育て得る者としての自己を形成し、育てる者……それは育てられる者との対比を生み出し、育ててやる者と育ててもらう者へと意識は転化する。

養育の計画を立て、それに従って関わっていくという、一見誰もが納得しそうなことが、いやに胡散臭い行為であること、自らの養護施設での働きの中でそれとなく感じてきた。

どんなに丁寧な見直しをしたとしても、どこまでも子どもたちのその生き方へ積極的で正確な関わりを基準を得られるものなのだろうか。また、どんな眼が次の年度を見通すことなど出来るのだろうか。心理学や教育学などで言われる「洞察」を正確にできる予言者のような人が、この養護施設の世界に何人存在

するのだろうか。

先号本欄に、その生活感覚を共有できず、やたらに自分の言うことをきかせ、思い通りにしようと躍起になっている者が養護施設には多い、と書いた。

「思い通り」「言うことを聞かせる」ための手段にこの「計画」は容易に転化する。そしてはいけない等の減法多い規則や約束を守らせ、不幸にも違反した者に自らの感情も重ね、〈謝りなさい!〉と居丈高に迫り、これまでの生活史で喪失した、自らを辛くも支える自尊の心を完膚無きまで駆逐してしまう。そんな職員と一緒に生活させられている子どもたちはたまたまのものではない、とも書いた。そんな職員になったことのない者がどこにいるのだろうか。

実に私たちが陥る誤謬は、一見科学的で客観的なシステムによる計画などの中にあるのだ。子ども、いや人間が生きて、育つということは、順逆の多少の差異があったとしても、たくさん偶然の集積の上に成り立っているものではないだろうか、とこの頃考える。(この項続く)

日誌抄

六月一日
七月末日まで

六月二日 井上若子さんよりハ

ンバーグ、焼き豚などを沢山
ありがとうございました。三日 栗原忠さんよりいつもの
お励ましを。感謝四日 マイフーズ小林保子さん
より子どもたちの間で盛んな

一輪車を。ありがとう！

七日 大根根町に結成された光
の子どもの家後援会役員会。十二日 青山学院キリスト教学
生会のワークキャンプ。十三日 日本キリスト教団岩槻
協会青年会、一昨年より定期的に子どもたちと遊ぶなどの
お手伝いを、この月も。〇東大宮教会の永野三恵さんよ
り衣類を沢山。感謝。十六日 埼玉県指導監査実施。
二九日 遠藤昌代さんよりサク

ランボを沢山。ごちそうさま。

三十日 県内各地の子どもの家
族の住む家庭訪問をこの日から。家族の色彩が最も濃くな
るお盆の季節にせめて一泊でも親子で、家族で過ごし、こ
の国で育つものの当たり前前持つ情緒を可能な限り育てた
いと願って、家族の家にいる
時間に合わせて昼となく夜と
なく走り回る。七月二日 慈恵医大付属柏看護
学院で菅原が講演。九日 慈恵医大付属看護学院生
見学。十二日 江森ヘヤーサロン、誠
次氏の遺志を継いで、奥様、ご長男夫婦が揃って調髪のご
奉仕を毎月。感謝。十七日 数年前から物心両面に
わたるご支援をいただいている東京電力の関係者によるヴ
ォランティアグループ「はむこ会」より、食堂関連の食器
を沢山。ありがとう。二十日 夏休みオープンング・
フェスティバルを。夏休みの獲得目標を披露し決意表明す
る。今にも降りそうな空を睨みながらのバーベキューも。
二二日 町内斉藤布団店より衣

類をたくさん。感謝。

二三日 この日から毎年恒例に
なっている女子聖学院短期大学のワークキャンプを一泊二
日で草取り作業と礼拝と。
二五日 三年前にお家へ帰った塩野姉妹八ヶ岳登山をメイ
ンにした十日間の変則的里帰り。
二七日 この日から、(株)フリックよりご提供の長野県小
海町の山荘をベースキャンプに、八ヶ岳の主峰赤岳への登
頂と陶芸家池端寛氏ご指導の陶芸教室、谷本画伯のアトリ
エでの作品鑑賞会などすてきなプログラムの夏休み行事第
一弾を三泊四日で。二九日 光の子どもの家後援会
の草取りのご奉仕。感謝。このように立派な通知表を獲得
して一学期が終わり、少し不順ではありますが楽しい夏休
みに入りました。ご支援心か

ら感謝して励みます。(くら)

◎後援会からのお知らせ

◆バザーご協力をお願い

藏出し品のご寄付をお願い
します(11/10までに)。

送り先

〒114 北区上十条三一二七-十

水川歯科医院内

奉仕の箱アップルクラブ
☎〇三(三九〇五)〇四一八

反射光

台風が何回もき
て、その度に秋
の色が深まって迎いはすっかり秋です☆TVの
アナウンサーがP.L.Oのアラファ
ト議長をアメリカのSPが警護
していると報道していました。
☆変化が時代なのです☆先日、
三年ほど前にいなくなった、こ
こで子どもたちと一緒に暮らし
ていた子どもたちの母から子どもた
ちに手紙が来ました。元気でい
るか、会いたいという切々たる
内容でした。でも、その手紙に
は住所は書いてありませんでした。
何が起きたのか、どうして
いるのかはつきりしたことは何
一つわかりません。そんな子ど
もたちがここに三〇人も生活し
ています。親との関係さえ確実
ではありません☆そんな事実
にふと眼が眩みそうになります☆
それでも伝えるべき何かを伝え、
人は確実に愛されるべきことと、
そして未来は子どもたちによつ
て創られることを信じられるよ
うに、励まなければならぬと思
いました。真の暗闇にこそ、
どんな小さな光でも輝いて役立
つのですから。
(折)